



図1 南島ヒスイ製品出土地点

国土地理院250m・50mメッシュ使用 カシミール3Dにて作成。

これら南島のヒスイは、新潟県糸魚川市フォッサマグナミュージアムにおいて、X線マイクロアナライザーによる半定量分析および肉眼観察による鑑定を経た結果、すべて糸魚川地域産ヒスイであるとされた。原産地である新潟県から最南端の沖縄県まで、日本海側から沿岸部を最短の海路をとっても、じつに1800km以上の距離がある。逆に北方では、北海道の礼文島や道東にまで流通している。縄文時代における最長距離級の遠隔地移動物資である。

(4) もたらされた時代・時期(表1)

明確な時期が分かるものは少ないが、奄美・沖縄地域から見ると、現在確認される最も古い段階は、伊礼原遺跡例から面縄東洞式・仲泊式段階であり、西長浜遺跡・吹出原遺跡例から室川式段階、最も新しい段階はトマチン遺跡・クマヤー洞穴遺跡例から仲原式前後になると考えられ、貝塚時代前4期初頭から前5期末にかけてもたらされている。これは、本土の編年観と照合すれば、縄文時代後期中葉〜弥生時代前期までの時期に並行すると考えられる。種子島現和巣採集の緒締形大珠は、周辺で採集された土器が市来式土器であったとすれば(橋口1999)、縄文時代後期中葉となる。南島出土品においても群を抜く好資料で、奄美・沖縄地域で見られるような小型資料とは、形態的にも時期的にも違いがあり、九州地域の大珠の流通と連動する可能性が高い。大坪志子による研究(2015)では、九州地域において大珠は縄文時代後期初頭〜前葉の所産で、管玉・獣形勾玉・丸玉は、一部縄文時代後期初頭の例はあるものの後期後葉から出現するのが一般的であり、晩期以降に九州各地に分布が拡大するという。このことから、南島ヒスイ資料の搬入時期に關しては、九州地域の動向におおむね連動していると考えたほうが